



一般社団法人熊本県工業連合会

代表理事会長 金森 秀一

(株式会社オジックテクノロジーズ 代表取締役社長)

強みを磨く

技術も市場も常に変化する。そしてそれは多方面から襲ってくる危機への対応によってもたらされることが多い。企業にはその変化の方向性を見極め対応する組織力が重要だ。コロナ禍は人とモノの動きを世界同時的に停止させ、近未来に想定されていた超デジタル社会へのパラダイムシフトを僅か3カ月で急速に進めた。リモートワーク、ネット配信、ネット調達、遠隔医療など通信量は膨大となってきており、通信インフラの増強が急務だ。さらに今後の自動車の自動運転やスーパーシティ構想を実現するためにはさらなる投資が必要になってくる。次世代移動通信システム「5G」はすでに「高速・大容量」という機能のモバイル向け通信サービスへの適用が始まっているが、それに加えて重要な機能として「超低遅延」「多数同時接続」を備えている。自動運転や遠隔手術など高次元のオペレーションにはこれらの機能が不可欠になってくる。データセンターも「超低遅延」に対応するために中央集権的大型タイプからエッジに移ってくる。つまりユーザーに近いところに多数の小型データセンターが作られることになる。これらのデジタル化を進める中で必要不可欠なのが半導体だ。2020年の世界の半導体市場はWSTS（世界半導体市場統計）によると46兆円。2010年の32兆円から年平均約4%の成長率である。今後も同率で成長すると2030年には65兆円。さらに高い成長を見込むアナリストは多数いる。しかもこの成長は単なる膨張でなく技術革新によるイノベーションを継続して得られる成長だ。開発も生産もサプライチェーン企業は血のにじむような努力をしている。

日本はパワーデバイスや映像デバイス、NANDフラッシュメモリーなどの特殊半導体、半導体製造装置、半導体材料では世界をリードしている。そして熊本にはそれらの代表的企業とそのサプライチェーンの集積がある。地域産業が有する比較優位の程度を表す指標である特化係数は、例えば就業者数については全国平均1.0に対して熊本は電子デバイス製造業で5.05（全国第4位）、半導体・フラットパネル製造装置製造業で7.36（全国第2位）である。熊本の半導体関連産業の集積は世界のデジタル化を支えているのである。その集積がこれから10年後も世界を支え続けるためには生産においても開発においてもその集積の厚みを増すことが重要だ。

国もサプライチェーンの強靱化に力を入れてきている。主要産業のサプライチェーンの空洞化を危惧し国内回帰を促す動きだ。熊本も拡大する半導体関連ビジネスを海外に流出させてはならない。

コロナ禍で本業立て直しに努力している企業が多数ある。本業に注力しつつも、その経営資源の一部を新しい環境に対応した新たな試みやビジネスに向けて企業も出てきている。産学官金が連携を密に意欲ある企業をサポートして、熊本の半導体関連産業の厚みを増し、コロナ後の地域経済発展に寄与していきたいと思う。